資治通鑑 第 125 巻

令和 3 年 8 月 21 日

【宋紀七】　起強圉大淵獻，盡上章攝提格，凡四年。

■宋、●北魏、（続国訳漢文大成．経子史部 第 7 巻 289p から）

太祖文皇帝中之下元嘉二十四年（丁亥，４４７年）（魏の太平真君８年）

■春，正月，甲戌（２６日），大赦す。

●魏の吐京胡及び山胡の**曹僕渾**等が反す。二月，征東將軍の武昌王の**提**等は討ちて之を平らぐ。癸未（５日），**魏主**は中山に如く。

●［北涼の沮渠牧犍は死を賜わる］魏の師之敦煌（姑藏にすべし、123 巻 16 年）に克つ也，**沮渠牧犍**（北涼３代目）は人をして府庫を斫（き）り開か使め，金玉及び寶器を取り，因りて復た閉めず。小民は爭って入りて之を盜み取り，有司は盜を索すれども獲ず。是に至りて，**牧犍**の親しい所及び守藏者が之を告げ，且つ言う、

「**牧犍**父子は多く毒藥を蓄え，潛かに人を殺すこと前後に百を以て數える。況んや復た姊妹は皆な左道（曇無讖の術を学ぶ）を學ぶ。」

有司は**牧犍**の家を索し，匿す所の物を得る。**魏主**は大いに怒り，**沮渠昭儀**（後宮の興平公主）に死を賜わり，並びに其の宗族を誅し，唯だ**沮渠祖**のみ先に降る（元嘉 16 年にあり）を以て免ずるを得る。又た、

「**牧犍**に猶ほ故（もと）の臣民と交通して反を謀る」

と告げる者有り，三月，**魏主**は**崔浩**を遣わして第に就きて**牧犍**に死を賜わり，謚して**哀王**と曰う。(7-290P)

●魏人は定州の丁零の三千家を平城に徙す。

●六月，魏の西征の諸將の**扶風公**の**處真**等八人は，軍資を盜沒し及び虜掠し贓するは各千萬計りなるに坐して，並びて之を斬る。

■［宋の貨幣の改鋳］初め，**上**は貨の重く物の輕きを以て，改めて四銖錢（元嘉 7 年に鋳る、121 巻）を鑄す。民は多く古錢を翦鑿し，銅を取りて盜鑄する。**上**は之を患う。錄尚書事の江夏王の**義恭**は建議して，大錢の一を以て兩に當てるを請う。

右僕射の**何尚之**は議して曰く、

「夫れ泉貝（貨幣）之興るは，估貨（商品売買）を以て本と為し，事は交易に存し，豈に多鑄を假らんや！數少なければ則ち幣は重く，數多ければ則ち物重し，多少は異なると雖も，用を濟（成）すは殊ならず。況んや復た一を以て兩に當てるは，徒らに虛價を崇める者を邪？若し今の制遂に行われれば，富人之貲は自ずと倍し，貧者は彌（いよいよ）其の困を增さん，懼らくは之を均壹せ使むる所以（ゆえん）に非ざる也。」

上は卒に**義恭**の議に從う。

■［劉義季は酒乱にて卒］秋，八月，乙未（２０日），徐州刺史の衡陽文王の**義季**は卒す。**義季**は彭城王の**義康**之貶（へん）（123 巻 17 年）せられしより，遂に酒を縱（ほしいまま）にし事を事とせず。**帝**は書を以て誚責し，且つ之を戒めるも，**義季**は猶ほ酣飲して自若たり，以て疾と成るに終わるに至る。

●魏の樂安宣王の**范**は卒す。

■［胡誕世の叛乱鎮圧］冬，十月，壬午（８日），**胡簉**（豫章に家す）之子の**誕世**は豫章太守の**桓隆之**を殺し，郡に據りて反し，前彭城王の**義康**を封じて主と為さんと欲す。前交州刺史の**檀和之**は官を去りて歸り，豫章を過ぎ，擊ちて之を斬る。

■十一月，甲寅（１０日），皇子の**渾**を封じて汝陰王と為す。
●十二月，魏の晉王の**伏羅**は卒す。
●［楊文徳の反乱］**楊文徳**は葭蘆城（甘粛省渭川道武都県の東南、現・隴南市武都区）に據りて，氐、羌を招き誘い，武都等五郡（魏の置く武都・天水・漢陽・武階・仇池の五郡）の氐は皆な之に應ず（続は附）。

太祖文皇帝中之下元嘉二十五年（戊子，４４８年）

●［魏の公主は一国の母を望み死を賜る］春，正月，魏の仇池の鎮將の**皮豹子**は諸軍を帥いて之を撃つ。**文徳**の兵は敗れ，城を棄てて漢中に奔る。**豹子**は其の妻子、僚屬、軍資及び**楊保宗**の尚する所の**魏の公主**を収めて還る。初め，**保宗**（前巻 20 年）が將に叛かんとするに，**公主**は之を勸む。或るひと曰く、
「奈何をして父母之國に叛かんとすか？」
公主は曰く、
「事成れば，一國之母と為る，豈に小縣の公主に比べる哉！」
魏主は之に死を賜う。**楊文徳**は守りを失うに坐して，官を免じ，爵土を削られる。(7-290p)
●二月，癸卯（３１日=二月閏朔日），**魏主**は定州に如き，塞圍（畿上に塞圍を置くこと前巻 23 年）の役者を罷める。遂に上黨に如き，潞縣の叛民二千餘家を誅し，西河（河西は誤り）の離石の民五千餘家を平城に徙す。
■閏月，己酉（７日），**帝**は大いに宣武場（洛陽に倣って建康の台城の北に置く）に於いて蒐（集）す。

■［宋の庾炳之失脚］初め，**劉湛**は既に誅せられ，**庾炳之**は遂に寵任せ見れ，累遷して吏部尚書となり，勢いは朝野を傾く。**炳之**は文學無く，性は強急にして輕淺。既に選部に居り，好く賓客に詬詈し，且つ多く貨賂（賄賂）を納め，士大夫は皆な之を惡む。**炳之**は令史二人を留めて私宅（令史は省中の文案を掌り、私宅に宿すべからず）に宿せしめ，有司の糾する所と為る。**上**は其の過ちを薄しとし問わざらんと欲す。僕射の**何尚之**は因りて**炳之**の短を極陳して曰く、
「**炳之**は人の燭盤、佳驢有るを見れば，乞丐(乞い求める)せざる無からん。選び用うるに平らかならず，一二（その罪を一二に数える）は可からず。朋黨を交結し，是非を構扇し，俗を亂して風を傷めること，**范曄**（後漢書を著作した政治家）を過ぎ，少なき所は，賊の一事のみ（反逆のみ欠く）。縦え罪を加えずとも，故に宜しく之を出すべし。」
上は**炳之**を以て丹陽尹と為さんを欲す。**尚之**は曰く、
「**炳之**は罪を蹈み恩に負き，方に復た尹京に赫赫（詩の「赫赫たる帥尹」の引用）たるの授有れば，乃ち更に其の形勢を成す也。古人云く『賞無くして罰無くば，堯舜と雖も、治を為す能わず。』(漢の宣帝の引用) 臣は昔の**范曄**に啟（啓、123 巻 17 年にあり）し，亦た顔を犯すを懼れ，苟しくも愚懐を曰はば，九死するとも悔いず。古今を歴觀するに，未だ衆過は藉藉として，貨を受けること數百萬なり，更に高官と厚祿を得ること**炳之**の如き者は有らざる也。」
上乃ち**炳之**の官を免じ，**徐湛之**を以て丹陽尹と為す。彭城太守の**王玄謨**は上言す、
「彭城（徐州）は要（地）にして水陸（魏が宋を攻めるにみな徐州を通る）を兼ねる，皇子を以て州事を撫臨するを請う。」

■夏，四月，乙卯（１４日），武陵王の**駿**を以て安北將軍、徐州刺史と為す。

●五月，甲戌（４日），魏は交趾公の**韓拔**を以て鄯善王と為し，鄯善（新疆ウイグル自治区若羌県）に鎮ぜしめ，其の民に賦役するは，之を郡縣に比す。
■兩に當たる大錢は之を行うに時を經て，公私に以て便と為さず、己卯（９日），之を罷む。
■六月，丙寅（２４日），荊州刺史の南譙王の**義宣**を進めて司空の位とす。
●辛酉（２１日），**魏主**は廣德宮（陰山の北に造営し、楊難當来朝）に如く。
■秋，八月，甲子（２５日），皇子の**彧**を封じて淮陽王と為す。(7-292p)

【魏は柔然を徹底攻撃成功】
●［柔然の挟撃］西域の般悦國(北史に悦般国、伊犂地方、現・新疆ウイグル自治区伊寧市とカザフスタン東部、グルジャ、トルコ族)は平城を去ること萬有餘里，遣使して魏に詣らしめ，魏とともに東西から柔然を合い撃つことを請う。**魏主**は之を許す，中外は戒嚴す。
■九月，辛未（２日），尚書右僕射の**何尚之**を以て左僕射と為し，領軍將軍の**沈演之**を吏部尚書と為す。
●丙戌（１７日），**魏主**は陰山に如く。
●［萬度歸の焉耆戦］魏の成周公の**萬度歸**は、焉耆（カラシャール、現・新疆ウイグル自治区バインゴリン・モンゴル自治州焉耆回族自治県）を撃ち，大いに之を破り，焉耆王の**鳩尸卑那**(きゅうしひな)は龜茲（現・アクス地区庫車市）に奔る。**魏主**は**唐和**（元柔然の伊吾王・唐契の弟）に詔して前部（車師前国）王の**車伊洛**（車師の大師、世々魏に附く）と所部の兵を師いて**度歸**に會して西域を討たしむ。**和**は說きて柳驢等六城を降す，因りて共に波居羅城を撃ち，之を抜く。
●［弘農昭王の奚斤］冬，十月，辛丑（３日），魏の弘農の昭王の**奚斤**は卒す，子の**它觀**は襲（世襲）う。**魏主**は曰く、
「**斤**の關西之敗（121 巻 5 年にあり）は，罪は固(もと)より死に當たる。**朕**は**斤**が先朝に左命たるを以て，其の爵邑を復し，天年を終わるを得さ使め，君臣の分また足る矣。」
乃ち**它觀**の爵を降して公と為す。●癸亥（２５日），魏は大赦す。
●［萬度歸の龜茲戦］十二月，魏の**萬度歸**は焉耆より西に龜茲（クチャ、現・新疆ウイグル自治区アクス地区庫車市）を討つ，**唐和**を留めて焉耆（現・バインゴリン・モンゴル自治州焉耆回族自治県）に鎮ぜしむ。柳驢戍主の**乙直伽**は叛を謀り，**和**は撃ちて之を斬る，是に由りて諸胡は鹹(みな)附き（続は服），西域は復た平らぐ。
●［魏の太子の柔然討伐］魏の**太子**は行宮（陰山、陰山山脈の南、黄河の北岸）に於いて朝し，遂に從いて柔然を伐つ。受降城（魏の武帝の築く城）に至り，柔然を見ず，因りて糧を城内に積み，戍を置いて還る。

太祖文皇帝中之下元嘉二十六年（己丑，４４９年）

●［北魏の柔然戦］春，正月，戊辰朔（１日），**魏主**は群臣を漠南に於いて饗す。甲戌（７日），復た柔然を伐つ。高涼王の**那**は東道より出で，略陽王の**羯兒**は西道より出で，**魏主**と**太子**は涿邪山より出で，行くこと數千里なり。柔然の**處羅可汗**は恐懼して，遠く遁る。
■二月，己亥（３日），**上**は丹徒（江蘇省金陵道丹徒県、現・鎮江市丹徒区）に如き，京陵を謁す。三月，丁巳（朔日丁卯、丁丑１１日、丁亥２１日），大赦す。諸州に移るを樂しみとする者の數千家を募って以て京口に實(みた)す。
●庚寅（２４日），**魏主**は平城に還る。
■夏，五月，壬午（１７日），**帝**は建康に還る。
●庚寅（２６日），**魏主**は陰山に如く。

■［宋の北伐中止］**帝**は中原を經略せんと欲し，群臣は爭って獻策し迎合を以て寵を取る。
彭城太守の**王玄謨**は尤（最）も進言を好み，**帝**は侍臣に謂って曰く、
「**玄謨**の陳ずる所を觀るに，人をして狼居胥（漢の霍去病は匈奴を伐ち、狼居胥に封じて、蒙古沙漠の北の姑衍に禪し、乾いた海すなわちタクラマカン砂漠である瀚海に臨む）に封じるの意有ら使む。」
御史中丞の**袁淑**は**上**に言って曰く、
「**陛下**は今當に趙、魏を席捲し玉を**岱宗**に檢ずべし（泰山に封ずるに玉檢を用いる）。臣は千載之會に逢い，願わくは封禪書を**上**らん。」
上は悅ぶ。**淑**は，**耽**之曾孫也。
■［襄陽に雍州軍府を置く］秋，七月，辛未（７日），廣陵王の**誕**を以て雍州刺史と為す。(7-293p)**上**は襄陽が外に關（關中）、河（黃河）に接するを以て其の資力を廣めるを欲し，乃ち江州の軍府を罷め，文武を悉く雍州（晉の孝武帝は始めて襄陽に雍州を立て、併せて僑郡県を立つ）に配す。湘州の台に入る租稅は，悉く襄陽に給す。
●［北魏の柔然戰完勝、柔然衰弱］九月，**魏主**は柔然を伐つ。高涼王**の那**は東道より出で，略陽王**の羯兒**は中道より出でる。柔然の**處羅可汗**は國中の精兵を悉くして**那**を圍むこと數十里。**那**は塹を堀り堅守し，相持つこと數日。**處羅**は數々挑戰し，輒ち**那**の敗るる所と為る。**那**の衆の少く而して堅きを以て，大軍が將に至らんとすると疑い，圍みを解いて夜去る。**那**は兵を引いて之を追うこと，九日九夜。**處羅**は益々懼れ，輜重を棄て，穹隆嶺を逾えて遠く遁る。**那**は其の輜重を收め，軍を引いて還り，廣澤に於いて**魏主**と會う。略陽王の**羯兒**は柔然の民や畜の凡そ百餘萬を收む。是れより柔然は衰弱し，跡を屏め敢えて魏の塞を犯さず。冬，十二月，戊申（１７日），**魏主**は平城に還る。

■［宋の蠻討伐］沔北の諸山の蠻（虫、反乱一揆）が雍州を寇す，建威將軍の**沈慶之**、後軍中兵參軍の**柳元景**、隨郡太守の**宗慤**等は二萬人を帥いて之を討ち，八道より俱に進む。是より先，諸將の蠻を討つ者は皆山の下に營じ以て之に迫り，蠻は山に據りて矢石を發して以て擊つを得，官軍多いに利あらず。**慶之**は曰く、
「去る歲に蠻の田は大きく稔り，穀を重巖に積み，之と日を曠（同）しくして相い守る可からざる也。其の不意に出でて，其の腹心を衝くに若かず，之を破るは必ず矣。」
乃ち諸軍に命じて木を斬り山に登り，鼓噪して前ましむ，群蠻は震え恐る。其の恐るるに因りて乘じて之を擊ち，向かう所奔り潰ゆ。

太祖文皇帝中之下元嘉二十七年（庚寅，４５０年）

●春，正月，乙酉（２４日），**魏主**は洛陽に如く。
■［宋の蠻討伐］**沈慶之**は冬より春に至り，屢々雍州の蠻を破る。蠻の聚まる所の穀に因りて以て軍食に充ち，前後の斬首は三千級，二萬八千餘口を虜とし，降る者は二萬五千餘戶なり。幸諸山の大羊蠻は險に憑りて城を築き，守禦は甚だ固し。**慶之**は之を擊ち，諸軍に命じて山中に於いて營を連ね，門を開いて相通じ，各々は池を營內に穿ち，朝夕は外に汲まず。之頃らくして，風は甚しく，蠻は兵を潛めて夜來て營を燒く。諸軍は池の水を以て火に沃ぎ，多く弓弩を出して夾みて之を射ち，蠻の兵は散じて走る。蠻の據る所は險固にして，攻める可からず，**慶之**は乃ち六戍を置いて以て之を守る。之久しくして，蠻は食盡き，

稍稍(ようやく)降らんと請う。悉く建康に遷して以て營戸と為す。

【北魏は懸瓠を包囲し激戦】

●［北魏の南進計画］**魏主**は將に入寇せんとす。二月，甲午（３日），梁川（山西省雁門道陽高県、現・大同市陽高県）に於いて大獵す。

■**帝**は之を聞き，淮、泗の諸郡に敕するに、

「若し魏寇が小さく至るなら，則ち各々が堅く守るべし。大きく至るなら，則ち民を拔いて壽陽に歸すべし。」

邊戍は偵候するも明らかならず。

●［南頓・潁川太守は奔る］辛亥（２０日），**魏主**は自ら步騎十萬を將して至らんとす。南頓（元南頓県を晉恵帝が郡にす、河南省開封道項城県、現・周口市項城市）太守の**鄭琨**、潁川太守の**郭道隱**は並びて城を棄てて走る。

■［魏は懸瓠を囲む］是の時，豫州刺史の南平王の**鑠**は壽陽に鎮し，左軍行參軍の**陳憲**を遣わして汝南郡の事を行い，懸瓠を守らしめ，城中戰士の千人に滿たず，**魏主**は之を圍む。

■三月，軍を興すを以て，內外百官の俸を三分之一に減ず。(7-294p)

●［北魏の懸瓠攻略戦］魏人は晝夜となく懸瓠（河南省汝陽道汝南県、現・駐馬店市汝南県）を攻め，多く高樓を作り，城に臨みて以て之を射ち，矢は下ちること雨の如し。城中は戶を負いて以て汲み，衝車の端に大鉤を施して以て樓と堞(ひめがき)を牽き，其の南城を壞す。**陳憲**は內に女牆を設け，外に木柵を立てて以て之を拒む。魏人は塹を填ち，肉薄して城に登り，**憲**は將士を督厲するも苦戰し，屍を積んで城に等し。魏人もまた屍に乘りて城に上がる。短兵相い接し，**憲**の銳氣は愈々奮し，戰士は一で百に當たらざるは無く，殺傷は萬計り，城中の死者また過半す。

●**魏主**は永昌王の**仁**を遣わして步騎萬餘を將し，掠める所の六郡の生口を驅して北に汝陽に屯せしむ。

■［武陵王の駿は彭城から救援］時に徐州刺史の武陵王の**駿**は彭城に鎮し，**帝**は間使を遣わして**駿**に命じて騎を發し，三日之糧を繼いで襲わしむ。**駿**は百里內の馬を發して千五百匹を得，分けて五軍と為し，參軍の**劉泰之**を遣わして安北騎兵行參軍の**垣謙之**、田曹（営田を掌る）行參軍の**臧肇之**、集曹（流散の安集を掌る）行參軍の**尹定**、武陵の左常侍（晉の制度で王国には左右常侍を置く）の**杜幼文**、殿中將軍の**程天祚**等を帥いて之を將い，汝陽に直ちに趨かしむ。魏人は唯だ救兵の壽陽より來たるを慮(おもんぱか)り，彭城に備えず。

■［劉泰之らの救援軍敗北］丁酉（３月朔日は辛酉、丁卯７日、丁丑１７日、丁亥２７日、４月７日?），**泰之**等は潛かに進みて之を擊ち，三千餘人を殺し，其の輜重を燒き，魏人は奔り散り，諸生口は悉く東に走るを得る。魏人は**泰之**等の兵に後に繼ぐ無きを偵知し，復た兵を引いて之を擊つ。**垣謙之**は先ず退き，士卒は驚いて亂れ，仗を棄てて走る。**泰之**は魏人の殺す所となり，**肇之**は溺死し，**天祚**は魏の擒うる所となり，**謙之**、**定**、**幼文**及び士卒の免(まぬ)かるる者は九百餘人，馬で還る者は四百匹なり。

●［臧質らが懸瓠を救援］**魏主**は懸瓠を攻めること四十二日，■**帝**は南平內史の**臧質**を遣わして壽陽に詣(いた)り，安蠻司馬（南平王鑠は安蠻校尉を領し、その司馬）の**劉康祖**と共に兵を將いて懸瓠を救わしむ。●**魏主**は殿中尚書（殿內の兵馬倉庫を掌る）の任城公の**乞地真**を遣わして逆に之を拒ましむ。**質**等は擊ちて**乞地真**を斬る。**康祖**は，**道錫**（123 巻 18 年にあり）の從兄也。

●［魏主は兵を引いて還る］夏，四月，**魏主**（自陣を焼いて）は兵を引いて還る。癸卯（１３日），平城に至る。

■壬子（２２日），安北將軍の武陵王の**駿**は號を鎮軍將軍に降せられ，**垣謙之**を伏して誅し，**尹定**、**杜幼**

文は尚方（宮中の工房、続の上方は間違い）に付く。**陳憲**を以て龍驤將軍、汝南、新蔡二郡の太守と為す。

●［北魏の宋への挑戦状］**魏主**は**帝**に書を遺りて曰く、

「前には**蓋吳**（盧水胡の 418～446、前巻 22 年～23 年にあり）は反逆し，關、隴を扇動す。彼は復た人をして就いて之を誘わしめ，丈夫には弓矢を以て遺わし，婦人には環釧（腕輪）を以て遺わす。是の曹は正に譎誑（詭奇虚妄）して賂を取らんと欲し，豈に遠く相い服従するの理有らんや！大丈夫為るは，何ぞ自ら來りて之を取らざる，而るに貨を以て我が邊民を誘うか？往く者を募りて七年を復除し，是くは奸を賞する也。我は今來たりて此の土に至りて得る所の多少は，彼の前後して我が民を得るに孰與ぞ邪？」

「彼若し劉氏の血食を存せんと欲する者ならば，當に江以北を割きて之を輸し，守を攝（代わり、収め）めて南に渡らん。此くの如くならば，當に江南を釋して彼の之に居ら使むべし。(7-295p)然らざれば，善しく方鎮、刺史、守宰に敕して供帳（供張）の具を嚴にす可く，來秋は當に往きて揚州を取らん。大勢は已に至れば，終に相い縱はず。彼は往日は北の蠕蠕（柔然）に通じ，西は赫連（夏）、沮渠、吐谷渾と結び，東は馮弘（北燕）、高麗と連なる。凡そ此の數國は，我は皆之を滅ぼす。此くを以て觀るに，彼は豈に能く獨り立たんや！」

「蠕蠕、**吳提**、**吐賀真**は皆な已に死し，我は今北征し，先ず足有る之寇（柔然には馬有るの意味）を除かん。彼が若し命に從わざれば，來秋當に復た往きて之を取るべし。彼は足無きを以て，故に先ず討たざる耳。我れ往くの日，彼は何の計を作り，塹を堀り自ら守りと為し，垣を築きて以て自ら障うるを為す也？我は當に顯然として往きて揚州を取らん，彼が翳（隠）れて行き竊に步むが若きにあらざる也。彼が來りて偵諜し，我は已に之を擒にし，復た其の人を縱還せり。目の盡く見る所，委曲に善く之を問わん。」

「彼は前に**裴方明**をして仇池を取ら使め（前巻 20 年にあり），既に之を得るに，其の勇功を疾み，已に容れる能わず。臣は有ること此くの如く尚ほ之を殺す，烏んぞ我と校すを得ん邪！彼は我が敵に非ざる也。彼は常に我と一交戰せんと欲し，我は亦た癡ならず，復た**苻堅**に非ず，何れの時にか彼と交戰せんや？晝は則ち騎を遣わせて繞を圍み，夜は則ち彼の百里の外に離れて宿す。吳人は正に營を斫るの伎有りて，彼は人を募りて以て來たれば，行きて五十里を過ぎずにして，天已に明ける矣。彼の募られるの人之首は，豈に我の有に為らざるを得ん哉！」

「彼の公たる時の舊臣（謝晦・檀道済など）は老いたりと雖も，猶ほ智策有り，今已に殺し盡くされるを知り，豈に天の我を資けざる邪！彼を取りて亦た我が兵の刃に須うべからず，此に善く咒（呪）する婆羅門（印度より来たる呪術をよくするバラモン僧）有り，當に鬼をして縛し以て來たら使む耳。」

■侍中、左衛將軍の**江湛**は吏部尚書に遷る。**湛**の性は公廉，僕射の**徐湛之**と並んで**上**の寵し信じる所と為る，時に「江徐」と稱す。

【魏の崔浩は国史編纂で誅殺】

●［**魏の崔浩の寵任專制**］魏の司徒の**崔浩は**，自ら才略を恃んで**魏主**の寵任する所に及び，朝權を專制し，嘗て冀、定、相、幽、并五州の士數十人を薦し，皆な家より起こして郡守と為す。

太子の**晃は**曰く、

「先征（続は徴、高允など）の人も，亦た州郡之を選ぶ也。職に在ること已に久しく，勤勞未だ答いられず，宜しく先ず郡縣に補し，新征者を以て代わりて郎吏と為すべし。且つ守令は民を治め，宜しく事を更たる者（経験者）を得るべし。」

浩は固く争いて之を遣わす。中書侍郎、領著作郎の**高允**は之を聞き，東宮博士の**管恬**に謂って曰く、
「**崔**公は其れ免ぜざる乎！苟しくも其の非を而して遂げ勝ちを上に校べれば，將に之に堪える所以なりや（続は何以堪之）！」
●［崔浩の国史編纂事業の行き過ぎ］**魏主**は**浩**を以て秘書事を監し，**高允**等と共に《國記》を撰せしめ，曰く、
「實錄に從いて務むべし。」
著作令史の**閔湛**、**郗標**は，性は巧佞にして，**浩**の寵信する所と為る。**浩**は嘗て《易》及び《論語》、《詩》、《書》を注（釈）し，**湛**、**標**は**上**に疏（事柄の筋を分けていちいち説明する）して言わく、
「馬、鄭、王、賈（馬融・鄭玄・王蕭・賈逵の有名学者）は**浩**の精微に如かず，境内に諸書を収めて，**浩**の注する所を班ち，天下をして業を習わ令むを乞う。(7-296p)並びに**浩**に敕して《禮傳》を注（続は註）し，後生をして正義を觀るを得令めんを求む。」
浩は亦た**湛**、**標**を薦し著述の才有りとする。**湛**、**標**は又た**浩**に勸めて、
「撰ずる所の《國史》を石に刊し，以って直筆を彰かにすべし。」
高允は之を聞き，著作郎の**宗欽**に謂って曰く、
「**湛**、**標**の營む所は，分寸之間に，恐らくは**崔**門の萬世之禍と為らん，吾が徒も亦た噍類無からん矣！」
浩は竟に**湛**、**標**の議を用いて，石に刊して郊壇の東方百步に立て，功の三百萬を用いる。**浩**は魏之先世を書くに，事は皆な實に詳しく，衢路に列して，往來して見る者は鹹な以て言を為す。北人は忿恚せざるは無く，相い與に**帝**に**浩**を譖し，以て、
「國惡を暴揚す」
と為す。**帝**は大いに怒り，有司をして**浩**及び秘書郎吏等の罪狀を案ぜ使む。
●［太子は高允の助命嘆願］初め，遼東公の**翟黑子**は**帝**の寵有り，使いを并州に奉じて，布千匹を受く。事が覺われ，**黑子**は**高允**に謀りて曰く、
「**主上**は我に問えば，當に實を以て告げるべきか，為た當に之を諱むべきか？」
允は曰く、
「公は帷幄の寵臣にして，罪有るも首實（事実を自白）すれば，庶は或いは原さ見るとも，重ねて欺罔を為す可からざる也。」
中書侍郎の**崔覽**、**公孫質**は曰く、
「若し首實すれば，罪は測る可らず，之を諱むに如かず」
黑子は**允**を怨みて曰く、
「君は奈何して人を誘いて死地に就かすか！」
入りて**帝**に見みえ，實を以て對えず，**帝**は怒り，之を殺す。**帝**は**允**をして太子に**經**を授け使む。
崔浩が收め被れるに及びて，**太子**は**允**を召きて東宮に至らしめ，因って留め宿さす。明くる旦，與に俱に入朝し，宮門に至り，**允**に謂って曰く、
「入りて至尊に見みえれば，吾は自ら卿を導いて脫れしめん。至尊の問い有れば，但だ吾が語に依るべし。」
允曰く、
「何等の事の為め也？」
太子は曰く、

「入れば自ずから之を知るべし。」
太子は**帝**に見みえて言わく、
「**高允**は小心で真密だが且つ微賤なり。制は**崔浩**に由る，其の死を赦すを請う。」
帝は**允**を召し，問いて曰く、
「《國書》は皆な**浩**の為る所乎？」
對えて曰く、
「《太祖記》は，前著作郎の**鄧淵**の為る所なり。《先帝記》及び《今記》は，臣と**浩**の共に之を為る。然るに**浩**の領する所の事の多くは，總裁する已。著述に至れば，臣は**浩**より多し。」
帝は怒りて曰く、
「**允**の罪は**浩**より甚し，何を以って生きるを得んや！」
太子は懼れて，曰く、
「天威は嚴重にして，**允**は小臣なり，迷亂し次を失うのみ。**臣**は向に問いしに，皆な**浩**の為る所と雲う。」
帝は**允**に問う、
「**東官**の言う所の如く信ずるべき乎？」
對えて曰く、
「**臣**の罪は當に滅族すべく，敢えて虚妄せず。**殿下**は臣が侍講すること日久しきを以て，**臣**を哀れみ，其の生を丐わんと欲すのみ，實は**臣**に問わず，**臣**も亦た此の言無く，敢えて迷亂せず。」
帝は顧みて**太子**に謂って曰く、
「直なる哉！此れ人情の難しとする所なり，而して**允**は能く之を為す！死に臨みて辭を易えざるは，信也。臣と為りて君を欺かず，貞也。宜しく特に其の罪を除き以て之を旌すべし。」
遂に之を赦す。**(7-297P)**
●［高允の助命の努力］是に於いて**浩**を召すの前，臨みて之を詰む。**浩**は惶惑して對うること能わず。**允**は事事申明し，皆な條理有り。**帝**は**允**に命じて詔を為らしめ，**浩**及び僚屬の**宗欽**、**段承根**等を誅し，下は僮吏に至るまで，凡そ百二十八人，皆な五族を夷せんとする。**允**は疑いを持ちて（勅を）為らず。**帝**は頻りに催切（催促）せ使め，**允**は更に一たび見えて，然る後に詔を為るを乞う。**帝**は引いて前ま使め，**允**は曰く、
「**浩**之坐する所，若し更に餘釁（きん、兆し・傷）あれば，臣が敢えて知るに非ず。若し直にして以て觸り犯す（国悪を直書して尊者のために諱まざる）ならば，罪は死に至らず。」
帝は怒り，武士に命じて**允**を執らしむ。**太子**は之の為に拜して請い，**帝**は意を解き，乃ち曰く、
「斯の人無ければ，當に更に數千口の死有るべき矣。」
●［崔浩とその一族の誅殺］六月，己亥（１０日），詔して**浩**とその同宗者の清河の**崔氏**を誅するに遠近無く，及び**浩**の姻家の范陽の**盧氏**、太原の**郭氏**、河東の**柳氏**，並びに其の族を夷らぎ，餘は皆な其の身を誅して止まる。**浩**を執（続は繋）りて檻内に置き，城南（北魏では刑は城南で行う）に送り，衛士數十人は其の上に溲し，呼聲は嗷嗷として，行路に於いて聞く。**宗欽**は刑に臨みて歎じて曰く、
「**高允**は其れ殆ど聖なる乎！」
●［太子と高允の問答］它日，**太子**は**允**を讓めて曰く、
「人亦た當に機を知るべし。吾は卿の為に死を脱かれしめんと欲し，既に端緒を開き，而るに卿は終に從わず，**帝**を激怒さすこと此くの如し。之を念う毎に，人をして心悸せ使む。」
允は曰く、

「夫れ史なる者は，以て人主の善惡を記し，將來の勸戒と為す所なり，故に人主の畏忌する所有り，其の擧措を慎む。**崔浩**は聖恩に孤負し，私慾を以て其の廉潔を沒し，愛憎をして其の公直を蔽うは，此れ**浩**の責め也。朝廷の起居を書し，國家の得失を言うに至り，此く史の大體は，未だ多く違うと為さず（高允は浩の死はその罪に非ずとす）。**臣**は**浩**と實に其の事は同じく，死生榮辱，義は獨り殊なる無し。誠に**殿下**の再造之慈を荷なえども，心に違いて苟しくも免かるるは，臣の願う所に非らざる也。」

太子は容を動かして稱歎す。**允**は退き，人に謂って曰く、

「我は東宮の指導者を奉ぜざるは，**翟黑子**に負(そむ)くを恐れる故也。」

●初め，冀州刺史の**崔賾**，武城男の**崔模**は，**浩**と同宗の別族なり。**浩**は常に之を輕侮し，是れに由り睦まず。**浩**の誅さるるに及び，二家は獨り免かるるを得る。**賾**は，**逞**の子也。

●［魏主は崔浩の死を惜しむ］辛丑（１２日），**魏主**は北に陰山を巡る。**魏主**は既に**崔浩**を誅して之を悔やみ，會々北部尚書（北辺の州郡）の宣城公の**李孝伯**が病篤く，或いは已に卒すと傳わり，**魏主**は之を悼みて曰く、

「**李宣城**（李孝伯は宣城公）は惜しむ可きかな！」

既にして曰く、

「**朕**は言を失う，**崔**司徒は惜しむ可く，**李宣城**は哀しむ可きか！」

孝伯は，**順**之從父弟也，**浩**の誅せらるるより，軍國の謀議は皆な**孝伯**に出で，寵眷は**浩**に亞(つ)ぐ。

●［車師国と沮渠の争い］初め，車師の大帥の**車伊洛**は世々魏に服し，魏は**伊洛**を拜して平西將軍とし，前部王に封じる。**伊洛**は將に入朝せんとす，**沮渠無諱**（高昌に屯す）は其の路を斷ち，**伊洛**は屢々**無諱**と戰い，之を破る。(7-298p)**無諱**が卒して（元嘉 21 年），弟の**安周**は其の子の**乾壽**の兵を奪い，**伊洛**は人を遣わして**乾壽**を說き，**乾壽**は遂に其の民五百餘家を帥いて魏に奔る。**伊洛**は又た**李寶**の弟の**欽**等五十餘人を說いて之を下し，皆な魏に送る。**伊洛**は西に焉耆を擊ち，其の子の**歇**を留めて城を守らしむ。**沮渠安周**は柔然の兵を引いて間道から之を襲い，攻めて其の城を拔く。

●**歇**は走りて**伊洛**に就き，共に餘の衆を收めて，焉耆鎭を保ち，使いを遣わして**魏主**に上書して，言わく、

「沮渠氏の攻める所と為り，首尾八年（元嘉 19 年無諱襲いて高昌に拠る、此より車師と相攻める），百姓は饑窮し，以って自から存する無し。臣は今國を棄てて出奔し，免かるる者の三分の一を才するを得，已に焉耆の東境に至る，賑救を垂れるを乞う！」

魏主は詔して焉耆の倉を開き以て之を賑(にぎ)わす。

■［吐谷渾王の慕利延］吐谷渾王の**慕利延**は魏の逼まる所と為り，上表して入りて越嶲(えっすい)（郡）を保つを求め，**上**は之を許す。**慕利延**は竟(つい)に至らず。

【宋の北伐始動】

■［宋の北伐作戦計画］**上**は魏を伐たんと欲し，丹楊尹の**徐湛之**、吏部尚書の**江湛**、彭城太守の**王玄謨**等並びて之を勸む。左軍將軍**劉康祖**は以て為す、

「歲月は已に晩(おそ)し，明年を待たんを請う。」

上は曰く、

「北方は虜の虐政に苦しみ，義徒は並び起つ。兵を頓すること一週すれば，義に向かう之心を沮(はば)むは，不可なり。」

■[沈慶之の諫言]太子の歩兵校尉の**沈慶之**は諫めて曰く、

「我は歩にして彼は騎なり，其の勢いには敵わず。**檀道濟**が再び行く（元嘉７年）とも功無く，**到彦之**（121巻七年）は利を失い（眼疾甚だし）て返す。今料るに**王玄謨**等は，未だ兩將は逾えず，六軍之盛んなるは，往時に過ぎず，重ねて王師を辱かしむるを恐る。」

上は曰く、

「王師の再び屈するは，別に自ら由有り，**道濟**は寇を養いて自ら資し，**彦之**は中塗にして疾が動く。虜が恃む所の者は唯だ馬のみ。今夏の水は浩く汗し，河道は流れ通り，舟を泛べて北に下れば，碻磝は必ず走り，滑台の小戍は、覆い抜く可くは易し。此の二城に克ち、穀を館にして（敵人の積む穀物を当てにして糧食とする）民を弔えば，虎牢、洛陽は，自然に固からず。冬の初めに及ぶ比おい，城の守りは相接し，虜馬が河を過ぎれば，即ち擒と成る也。」

慶之は又た固く可からずと陳ず。**上**は**徐港之**、**江湛**をして之を難ぜ使む。**慶之**は曰く、

「國を治めるは譬えば家を治めるが如し，耕すは當に奴に問うべく，織るは當に婢を訪ねるべし。**陛下**は今國を伐たんと欲し，而して白面の書生の輩と之を謀る，事は何に由りてか濟らん！」

上は大いに笑う。太子の**劭**及び護軍將軍の**蕭思話**はまた諫め，**上**は皆な從わず。

●[**魏主の手紙**]**魏主**は**上**が將に北伐せんと聞き，復た**上**に書を與えて曰く、（胡三省、北魏はもう南宋を憚らず）

「彼と此との和好の日は久しく，而して彼の志は厭くこと無く，我が邊民を誘う。今春南を巡り，聊か我が民を省み，之を驅りて還ら使む。**(7-299p)**今彼が自ら來たらんと欲すと聞き，設し能く中山及び桑干川に至れば，意に隨いて行け，來りてまた迎えず，去りてまた送らず。若し其の區宇(のき、いえ)の者を厭わば，平城に來たりて居る可し，我もまた揚州に往きて，相い與に地を易えん。彼の年は已に五十，未だ嘗て戸を出でず，自ら力して來たると雖も，三歲の嬰兒の如し。我と鮮卑は馬上に生長する者と果たして如何哉！更に餘物の以て相い與える可きは無く，今獵馬十二匹並びに氈藥等の物を送る。彼の來るに道は遠く，馬力は乘ず可きに足らす。或いは水土に服せずんば，藥は自ら療す可き也。」

■[**宋の北伐作戦開始**]秋，七月，庚午（１２日），詔して曰く、

「虜は近ごろ摧挫（懸瓠を攻めて退く）すと雖も，獸心は革むる靡し。比は河朔、秦、雍の華(色々な)戎の表疏を得て，歸して困棘を訴え，跂ちて綏拯（やすらかに助ける）を望み，潛かに相い糾結し以て王師を候つ。肭肭（柔然）もまた間使を遣わして遠く誠款を輸び，掎（ひきとめる）角を為さんと誓う。經略之會は，實に茲の日に在り。寧朔將軍の**王玄謨**を遣わし**太子**の歩兵校尉の**沈慶之**、鎮軍咨議參軍の**申坦**を帥いて水軍は河に入り，青、冀二州刺史の**蕭斌**の督を受けしむ可し。太子の左衛率の**臧質**、驍騎將軍の**王方回**は徑に許洛に造るべし。徐、兗二州刺史の武陵王の**駿**、豫州刺史の南平王の**鑠**は各々所部を勒して，東西（一）齊に舉ぐべし。梁、南、北秦三州の刺史の**劉秀之**は汧、隴を震盪すべし。太尉の江夏王の**義恭**は出でて彭城に次し，衆軍の節度と為すべし。」

坦は，**鐘**の曾孫也。

■[**宋の兵の募集と資材の調達**]是の時軍旅は大いに起こり，王公、妃主及び朝士、牧守，下は富民に至るまで，各々金帛を獻じ、雜物を以て國の用を助く。又兵力の足らざるを以て，青、冀、徐、豫、二兗（南北兗州）六州の悉くの三五（三丁に一、五丁に二を徵発）の民丁を發し，倩いて暫く行か使め，符は至りて十日にして裝束（出発準備）す。緣江の五郡は廣陵（現・江蘇省揚州市広陵区）に集まらしめ，緣淮の三郡は盱眙（現・安徽省淮安市盱眙県）に集まらしむ。又中外に募りて馬步・衆藝・武力之士の科に應ずる者有れば，皆な厚き賞を加う。有司は又た軍用の充たざるを奏し，揚、南徐、兗、江四州の富民の家貲は五十萬に滿ち，僧尼は

二十萬に滿ち，並びに四分に一を借り，事の息めば即ち還さんとす。

■［宋の王玄謨の出陣］建武司馬の**申元吉**は兵を引いて碻磝に趨く。乙亥（１７日），魏の濟州（魏の明元帝は泰當８年に碻磝に置く）刺史の**王買德**は城を棄てて走る。**蕭斌**は將軍の**崔猛**を遣わして樂安（宋の樂安郡は千乘・臨濟・博昌３県管轄現・山東省淄博市・浜州市・東営市）を攻めしむ。魏の青州刺史の**張淮之**も亦た城を棄てて走る。**斌**と**沈慶之**は留まりて碻磝を守り，**王玄謨**をして進めて滑台を圍ましむ。雍州刺史の**隨王誕**は中兵參軍の**柳元景**、振威將軍の**尹顯祖**、奮武將軍の**曾方平**（南史は魯方平に作る）、建武將軍の**薛安都**、略陽太守の**龐法起**を遣わして兵を將して弘農に出でしむ。後軍外兵參軍の**龐季明**は，年七十餘にして，自ら以て關中の豪右なるを以て，長安に入りて夷、夏を招會すを請い，**誕**は之を許す。乃ち貲谷（盧氏県の南山の南、河南省河洛道盧氏県、現・三門峽市盧氏県）より盧氏に入る，盧氏の民の**趙難**は之を納れる。**(7-300p)季明**は遂に士民を誘說し，應ずる者甚だ衆く，**安都**等は之に因りて，熊耳山（盧氏の東）より出る。**元景**は兵を引いて繼ぎて進む。豫州刺史の南平王の**鑠**は中兵參軍の**胡盛之**を遣わして汝南（現・河南省駐馬店市汝南県）より出で，**梁坦**をして上蔡（現・河南省駐馬店市上蔡県）より出でて長社（現・河南省許昌市長葛市の東）に向わしむ。魏の荊州刺史の**魯爽**は長社に鎮し，城を棄てて走る。**爽**は，**軌**の子也。幢主の**王陽兒**は魏の豫州刺史の**僕蘭**を擊ち，之を破り，**僕蘭**は虎牢（現・鄭州市滎陽市汜水鎮）に奔る。**鑠**は又た安蠻司馬の**劉康祖**を遣わして兵を將して**坦**を助け，虎牢に進みて逼らしむ。

【北魏の反撃と南下】

●［北魏の反撃開始］魏の群臣は初め宋の師有るを聞き，**魏主**に言い，兵を遣わして(黃)河の緣の穀帛を救わんと請う。**魏主**は曰く、

「馬は今は未だ肥えず，天の時は尚ほ熱し，速かに出でても必ず功は無し。若し兵の來りて止まずば，且く陰山に還りて之を避くべし。國人（北荒より来る鮮卑人）は本は羊皮褥を著す，何の綿帛を用いんや！展べて（寬くする）十月に至れば，吾憂うる無し矣。」

●九月，辛卯（元嘉暦十月なら４日），**魏主**は兵を引いて南に滑台を救い，太子の**晃**に命じて漠南に屯し以て柔然に備えしめ，吳王の**余**には平城を守らしむ。庚子（十月なら１３日），魏は州郡の兵五萬を發して分けて諸軍に給す。

■［王玄謨は人望失う］**王玄謨**の士衆は甚だ盛んにして，器械は精嚴なり。而るに**玄謨**は貪愎して殺を好む。初め滑台を圍むや，城中に茅屋は多く，衆は火箭を以て之を燒くを請う。**玄謨**は曰く、

「彼は吾が財也，何んぞ遽かに之を燒かん！」

城中は即ち屋を撤して穴に處する。時に河、洛之民は競いて租穀を出し、兵（武器）を操りて來りて赴く者は日に千を以て數え，**玄謨**は其の長帥に即かず（新部隊を編成せず）而して以て私暱に配す。家ごとに匹布を付し，大梨八百を責（任）とす。是れに由りて衆心は失望す。攻城するに數月にして下らず，魏の救いが將に至らんと聞き，衆は車を發して營と為さんと請うも，**玄謨**は從はず。

●［４５０年１０月滑台攻防戦、魏主親征し王玄謨敗走］冬，十月，癸亥（元嘉暦十月閏なら７日），**魏主**は枋頭（現・河南省鶴壁市浚県）に至り，關內侯の代人の**陸真**をして夜に數人と圍を犯しめ，滑台に潛入し，城中を撫慰し，且つ城に登りて**玄謨**の營の曲折を視しめて還り報らす。

●乙丑（元嘉暦十月閏なら９日），**魏主**は河を渡り，衆百萬と號し，鞞鼓之聲は，天地を震動させる。**玄謨**は懼れ，退いて走る。魏人は之を追擊し，死者は萬餘人，麾下は散亡して略ぼ盡き，委棄する軍資や器械は山に積む。

■［垣護之の百舸の逃走］是より先，**玄謨**は鐘離（郡、安徽省淮泗道鳳陽県、現・淮南市鳳台県）太守の**垣護之**を遣わして百舸を以て前鋒と為し，石濟（河南省河北道延津県、現・新郷市延津県）に據らしむ，滑台の西南百二十里に在り。**護之**は魏兵の將に至らんとするを聞き，書を馳せて**玄謨**に急いで攻めるを勸めて曰く、

「昔**武皇**（115 巻晉安帝義熙 5-6 年）の廣固を攻めるや，死沒者は甚だ衆し。況んや今事は曩日よりも迫る，豈に士衆の傷つき疲れるを計り得んや！願くは城を屠むるを以て急に為さんや。」

玄謨は從はず。**玄謨**の敗退するに及び，**護之**に報じる暇なし。魏人は得る所の**玄謨**の戰艦を以て，鐵鎖の三重を以て連ね，河を斷ち以て**護之**の還る路を斷つ。(7-301p)河水は迅急なり，**護之**は中流に下る。鐵鎖に至る毎に，長柯の斧を以て之を斷ち，魏は禁ずる能わず。唯だ一舸を失うも，餘は皆な完備して返る。

（垣護之は帰還すると、江夏王劉義恭の下で驃騎戸曹參軍となり、淮陰に駐屯した。建武将軍の号を加えられ、済北郡太守を兼ねた）

●［蕭斌と沈慶之と玄謨の遭遇］**蕭斌**は**沈慶之**を遣わして五千人を將して**玄謨**を救わしめんとし，**慶之**は曰く、

「**玄謨**の士衆は疲老し，寇虜は已に逼まる，數萬人を得れば乃ち進む可し。小軍で輕々しく往くは，無益也。」

斌は固く之を遣らんとす。**玄謨**の遁り還るに會いて，**斌**は將に之を斬らんとし，**慶之**は固く諫めて曰く、

「**佛狸**（魏主の小字）の威は天下を震わし，控弦は百萬あり，豈に**玄謨**の能く當たらんとする所や！且つ戰將を殺すは以て自ら弱めるべく，良計に非ざる也。」

斌は乃ち止む。

■**斌**は固く碻磝を守らんと欲し，**慶之**は曰く、

「今青（州）冀（州）は虛弱なり，而も坐して窮城を守るには，若し虜衆が東に過ぎれば，清東（清水以東）は國家の有にあらざる也。碻磝が孤絕すれば，復た**朱修之**（122 巻 8 年）の滑台と作らんのみ。」

會々詔使は至り，**斌**等の師の退くを聽さず。**斌**は復た諸將を召して之を議し，

「宜しく留まるべし」

と並んで謂う。**慶之**は曰く、

「閫外之事は，將軍は以て之を專らにするを得る。詔は遠きより來たりて，事勢を知らず。節（旗）下に一の**范增**（漢の高祖の言）有れども用いる能わず，空議何を施すか！」

斌及び坐る者は並びて笑いて曰く、

「**沈**公は乃ち學問を更たり！」

慶之は厲聲して曰く、

「衆人は古今を知ると雖も，下官の耳學(問)に如かざる也。」

斌は乃ち**王玄謨**をして碻磝に戍せしめ，**申坦・垣護之**は清口（清水の黄河への入口）に據らしめ，自ら諸軍を帥いて歷城（現・山東省済南市歷城区）に還る。

■［龐法起等は盧氏・弘農に侵攻］（十月）閏月，**龐法起**等の諸軍は盧氏に入り，縣令の**李封**を斬り，**趙難**を以て盧氏の令と為し，其の衆を帥いて鄉導と為さしむ。**柳元景**は百丈崖（温谷の南、河南省河洛道盧氏県の南、現・三門峡市盧氏県）より諸軍に盧氏に從う。**法起**等は弘農に進攻し，辛未（１５日），之を拔き，魏の弘農太守の**李初古拔**を擒にす。**薛安都**は弘農（郡、現・三門峡市靈宝市北東、洛陽西方）に留屯す。丙戌（３０日），**龐法起**は進みて潼關（現・渭南市潼関県秦東鎮）に向う。

●［北魏の本格的侵攻］**魏主**は諸將に命じて道を分けて並びて進ましむ。永昌王の**仁**は洛陽より壽陽（現・安徽省淮南市寿県）に趨き，尚書の**長孫真**は馬頭（郡、安徽省淮泗道懐遠県東南、現・蚌埠市懐遠県懐遠県）に趣き，楚王

の**建**は鐘離に趣き，高涼王の**那**は青州より下邳に趣き，**魏主**は東平（現・山東省泰安市東平県）より鄒山（現・山東省済寧市鄒城市、魯郡の治所）に趣く。

●［**魏主は始皇帝石刻を見る**］十一月，辛卯（５日），**魏主**は鄒山に至る，魯郡の太守の**崔邪利**は魏の擒とする所と為る。**魏主**は秦の**始皇**の石刻（始皇帝の国内巡遊七刻石の鄒嶧山、BC219）を見，人をして排して之を僕（続は仆）さ使め，太牢を以て孔子を祠る。

■［**留城の戦い**］楚王の**建**は清西より進みて，蕭城（江蘇省徐海道蕭県、現・宿州市蕭県）に屯す。**步尼公**は清東より進みて，留城（徐海道沛県東南、現・徐州市沛県）に屯す。武陵王の**駿**は參軍の**馬文恭**を遣わしての兵を將して蕭城に向かわしめ，江夏王の**義恭**は軍主の**稽玄敬**を遣わして兵を將して留城に向かわしむ。**文恭**は魏の敗れる所と為る。**步尼公**は**玄敬**に遇い，兵を引いて苞橋（沛県の苞水の橋）に趣き，清西に渡らんと欲す。沛縣の民は苞橋を燒き，夜林中に於いて鼓を擊ち，魏は宋兵大いに至ると以て為し，爭って苞水を渡り，溺死者は殆んど半ばとなる。**(7-302p)**

■［**弘農と陝城の戦い、柳元景は捕虜を解放**］詔して**柳元景**を以て弘農太守と為す。**元景**は**薛安都、尹顯祖**をして先ず兵を引いて**龐法起**等に陝に就か使め，**元景**は後において租を督す。陝城は險固にして，諸軍は之を攻めて抜けず。魏の洛州刺吏の**張是連提**は衆二萬を帥いて崤(函谷關あたりの三險)を度りて陝を救い，**安都**等と城南に於いて戦い，魏人は突騎を縦ち，諸軍敵する能わず。**安都**は怒り，兜鍪を脱ぎ，鎧を解き，唯だ絳納と兩當衫（前は胸、後は背中に当たる）を著し，馬も亦た具装を去り，目を瞋して矛を横にし，單騎で陳を突く。向かう所前無く，魏人は夾み射るも中てる能わず。是くの如く數四，殺傷の勝げて數う可からず。日暮に會し，別將の**魯元保**は兵を引いて函谷關より至り，魏兵は乃ち退く。**元景**は軍副（副官）の**柳元怙**を遣わして步騎二千を將して**安都**等を救わしめ，夜に至るも，魏人は之を知らず。明くる日，**安都**等は城の西南に於いて陳ねる。**曾方平**は**安都**に謂って曰く、

「今勍い敵は前に在り，堅城は後に在り，是れ吾の死を取るの日。卿若し進まずば，我は當に卿を斬らん。我若し進まずば，卿我を斬るべき也！」

安都曰く、

「善し，卿の言は是れ也！」

遂に合戰す。**元怙**は兵を引いて南門より鼓噪して直ちに出で，旌旗は甚だ盛んなりて，魏の衆は驚駭す。**安都**は身を挺して奮擊し，流血は肘に凝まり，矛は折れ，之を易えて更に入り，諸軍は齊しく奮う。旦より日昃に至り，魏の衆は大いに潰え，**張是連提**及び將卒三千餘級を斬る。其の餘は河塹に赴き死する者甚だ衆く，生きて降るは二千餘人なり。明くる日，**元景**は至り，降者を讓めて曰く、

「汝輩は本は中國の民なり，今虜の為に力を盡くし，力屈して乃ち降るは，何んぞ也？」

皆な曰く、

「虜は民を驅りて戰わ使め，後れて出ずる者は族を滅し，騎を以て步に蹙る，未だ戰わざるに先ず死し，此れ將軍の親しく見る所となる。」

諸將は盡く之を殺さんと欲し，**元景**曰く、

「今王旗は北を指し，當に仁聲をして路に先だた令むべし。」

盡く釋して之を遣り，皆な萬歳を稱して去る。甲午（８日），陝城に克つ。

■［**關中の豪傑は呼応する**］**龐法起**等は潼關に進攻し，魏の戍主の**婁須**は城を棄てて走り，**法起**等は之に據る。關中の豪桀は所在にて蜂起し，及び四山の羌、胡は皆な來りて款を送る。

■［**宋の前線縮小**］**上**は**王玄謨**が敗退し，魏兵は深く入り，**柳元景**等が獨り進むは宜しからずを以て，皆

な召還す。**元景**は**薛安都**をして後を斷た使め，兵を引いて襄陽に歸る。詔して**元景**を以て襄陽太守と為す。

●［魏の懸瓠攻略作戦、劉康祖の戦死］魏の永昌王の**仁**は懸瓠（現・河南省駐馬店市汝南県）、項城（現・河南省周口市項城市）を攻め，之を拔く。**帝**は魏兵の壽陽に至るを恐れ，**劉康祖**を召して還さしむ。癸卯（１７日），**仁**は八萬騎を将いて**康祖**を追いて尉武（亭の名）に及ぶ。**康祖**の衆は八千人有り，軍副の**胡盛之**は山險に依りて間行して(壽陽に)至るを取らんと欲し，**康祖**は怒りて曰く、

「河に臨みて敵を求めるも，遂に見る所無し。幸いにも其の自ら送る，奈何して之を避けんや！」

乃ち車營を結びて進み，軍中に下令して曰く、

「顧望する者は斬首し，歩を轉ずる者は斬足すべし！」(7-303p)

魏人は四面から之を攻め，將士は皆な殊死して戰う。旦より晡に至る，魏の兵萬餘人を殺し，流血は踝を没す，**康祖**は身に十創を被り，意氣は彌厲し。魏は其の衆を分けて三と為し，且つ休み且つ戰う。日暮に會いて風は急になり，魏は騎を以て草を負わせて車營を燒き，**康祖**は隨いて其の闕を補う。流れ矢有り**康祖**の頸を貫き，馬から墜ちて死し，餘の衆は戰う能わず，遂に潰え，魏人は掩殺して殆ど盡くす。(魏軍は康祖の首級を彭城に送った。451 年元嘉 28 年、益州刺史の位を追贈された。諡は壯男といった。)

■［王羅漢は三郎將を討って逃亡］南平王の**鑠**は左軍行參軍の**王羅漢**をして三百人を以て尉武に戍せしむ。魏の兵は至り，衆は南の卑林に依りて以て自ら固めんと欲し，**羅漢**は命を受けるを以て此に居りて，去らず。魏人は攻めて之を擒にし，其の頸に鎖し，三郎將（魏の衛士をいう）をして之を掌らしむ。**羅漢**は夜に三郎將の首を斷ち，鎖を抱いて盱眙に亡奔す。

●魏の永昌王の**仁**は進みて壽陽に逼り，馬頭、鐘離を焚掠し、南平王の**鑠**は城を嬰して固守す。

●［江夏王義恭の彭城］魏軍は蕭城に在り，彭城を去ること十餘里。彭城の兵多しと雖も，食は少なく，太尉の江夏王の**義恭**は彭城を棄てて南に歸らんと欲す。安北中兵參軍の**沈慶之**は以為らく歷城の兵は少なく食多ければ，函箱車陳を為して，精兵を以て外翼と為し，二王及び妃女を奉じて歷城に直趨し、兵を分けて護軍の**蕭思話**に配して，留まりて彭城を守ら使めんと欲す。太尉長史の**何勗**は席捲して郁洲（続は鬱州、江蘇省徐海道灌雲県の東北、現・連雲港市灌雲県、东云台山一带の洲）に奔り，海道より京師に還らんと欲す。**義恭**は去る意は已に判ず。唯だ二議すること日を彌りて未だ決せず。安北長史の沛郡太守の**張暢**は曰く、

「若し歷城、郁洲に至るべき之理有らば，下官は敢えて高贊（高く拳を上げて賛成する）せず！今城中に食乏しく，百姓は鹹走るの志有り，但だ關扃の嚴固なるを以て，去らんと欲するも從る莫きのみ。一旦足を動かせば，則ち各々自ら逃散し，所在に至らんと欲すとも，何に由りて得る可けんや！今軍食は是れ寡しと雖も，朝夕猶ほ未だ窘罄(せまる)せず。豈に萬安の術を捨てて危亡の道に就く有らんや？若し此の計を必ず行われれば，下官は頸血を以て公の馬蹄を污さんと請う。」

武陵王の**駿**は**義恭**に謂いて曰く、

「阿父（義恭は駿の諸父）は既に總統（義恭は彭城にて諸軍を節度す）と為り，去留は敢えて干る所に非ず，**道民**（駿の字）は忝くも城主となり，而して鎮を委てて逃げ奔れば，實に復た朝廷に奉ずるに顔無し。必ず此の城と其の存沒を共にし，**張長史**の言は異なる可からざる也。」

義恭は乃ち止む。

●［**魏主**は**彭城を臨む**］壬子（２６日），**魏主**は彭城に至り，氈屋を戲馬台（彭城の南の項羽の築いた丘、高さ十仞）に立てて以て城中を望む。

●［李孝伯と安北長史の沛郡太守の張暢の問答］**馬文恭**之敗（蕭城の敗戦）する也，隊主の**劓應**は魏に没す。**魏主**は**應**を遣わして小市門に至り酒及び甘蔗を求めしむ。武陵王の**駿**は之を與え，仍って就けて橐駝(らくだ)を求める。明くる日，**魏主**は尚書の**李孝伯**をして南門に至らしめ，**義恭**に貂裘（てんの皮衣）を餉り，**駿**に橐駝及び騾（驢を父、馬を母とす、堅耐でよく走る）を餉り，且つ曰く、

「**魏主**は**安北**に意を至し，暫く出でて我を見る可し。我は亦た此の城を攻めず，何の為か將士を勞苦させ，此くの如く備守せんや！」(7-305p)

駿は**張暢**をして開門し出でて之を見て，曰わしめ、

「**安北**は意を**魏主**に至し，常に面寫(写、面談)を遲ち，但だ人臣には境外之交無きを以て，恨むは暫く悉くさず。備守するは乃ち邊鎮之常にして，悅びて以て之を使えば，則ち（民は）勞して怨むこと無きのみ。」

魏主は甘橘を求め及び博具を借りる，皆な之を與う、

復た氈及び九種の鹽、胡豉（豆に鹽を混ぜて作る）を餉る。又樂器を借り，**義恭**は之に應じて曰く、

「任を受けて戎行し，樂具を繼がず（持参せず）。」

孝伯は**暢**に問いて、

「何為んぞ匆匆（急遽な貌）と閉門し橋を絕つか？」

暢は曰く、

「二王は以えらく**魏主**の營壘は未だ立たず，將士は疲勞す。此の精甲は十萬，輕々しく相い陵踐せんを恐れ，故に城を閉じるのみ。士馬の休息を待ちて，然る後共に戰場を治し，日を刻して交々戲れる（戰う）べし。」

孝伯は曰く、

「賓に禮有り，主は則ち之を擇（選）ぶ。」

暢は曰く、

「昨は衆賓の門に至るを見るに，未だ禮有りと為さず。」

魏主は人をして來りて言わしめて曰く、

「意を**太尉**、**安北**に致し，何んぞ人を遣わして我の所に來り至らしめざるや？彼此之情は，雖だ盡くす可からず。要ず須らく我の小大を見，我の老小を知り，我の人と為りを觀るべし。若し諸佐は遣わす可からざれば，亦た僮幹（使令に給す者、伝令）をして來らしむ可し。」

暢は二王の命を以て對えて曰く、

「**魏主**の形狀才力は，久しく來往の具する所と為る。**李**尚書は親しく自ら命を銜み，彼此の盡くさざるを患えず，故に復た遣使せず。」

孝伯は又た曰く、

「**王玄謨**も亦た常才のみ，南國何の意か此くの如く任使を作り，以て奔敗を致すか？此の境に入りてより七百餘里，主人は竟に一たびも相い拒逆する能わず。鄒山之險は，君家の憑む所，前鋒は始めて接するや，**崔邪利**は遽に藏れて穴に入り（鄒山には石穴多く、土人は避難して兵を避ける），諸將は倒れ曳きて之を出す。**魏主**は其の餘生を賜わり，今從いて此に在り。」

暢は曰く、

「**王玄謨**は南土の偏將，才と謂為わず，但だ之を以て前驅と為し，大軍は未だ至らず，河冰は合するに向い，**玄謨**は夜に因りて軍を還し，戎馬の小さく亂るに致るのみ。**崔**邪利の陷沒（魯郡太守の捕虜となる）は，何んの國の損なるや！**魏主**は自ら數十萬の衆を以て一**崔邪利**を制し，乃ち言うに足らん邪！知る境に入る

こと七百里にして相い拒む者無きは，此れ自ら太尉の神算，鎮軍（武陵王駿は号を鎮軍将軍に降す）の聖略にして，兵を用いるには機有り，相い語るを用いず。」

孝伯は曰く、

「**魏主**は當に此の城を圍まず，自ら衆軍を帥いて直(ただち)に瓜歩（秦郡尉氏県の界、江蘇省淮揚道江都県、現・揚州市江都区）に造(いた)るべし。南の事を若し辦ずれば，彭城は圍むを待たず。若し其の捷たざれば，彭城も亦た須(もち)いる所に非ざる也。(7-305p)我は今當に南して江湖に飲み以て渇を療するのみ。」

暢は曰く、

「去留之事は，自ら彼の懐に適(まか)す。若し虜馬が遂に江に飲むを得るや，便ち復た天道無しと為す。」

是より先童謡に云ふ、

「虜馬は江水を飲み，**佛狸**は卯年に死す。」

故に**暢**は云うは然り。**暢**の音容は雅麗にして，**孝伯**は左右と皆な歎息す。**孝伯**もまた辯じて贍（足す）し，且つ去らんとし，**暢**に謂って曰く、

「長史は深く自愛せよ，相い去ること歩武（近し、足を上げていくを歩、足跡を武），手を執らざるを恨むべし。」

暢は曰く、

「君も善く自愛せよ，冀(こいねがわ)くは蕩定すること期有らん，相い見るに遠きは無し。君若し宋朝に還る期を得れば，今相い識る之始めと為さん」。

■［楊文徳の陽動作戦］**上**は**楊文徳**を起こして輔國將軍と為し，兵を引いて漢中よりに西に入り，汧、隴を搖動せしむ。**文徳**の宗人の**楊高**は陰平（甘粛省渭川道文県、現・隴南市）、平武（四川省西川道平武県、現・綿陽市平武県）の群氐を帥いて之を拒む。**文徳**は**高**を撃ち，之を斬り，陰平、平武悉く平らぐ。梁、南秦二州の刺史の**劉秀之**は**文徳**を遣して啖提氐を伐つも，克たず，執りて荊州に送る。（上は）**文徳**の從祖の**兄頭**をして葭蘆に戍せ使む。丁未（２１日），大赦す。

●［北魏軍は彭城を残して南下す］**魏主**は彭城を攻め，克たず。十二月，丙辰朔（１日），兵を引いて南下し，中書郎の**魯秀**をして廣陵（現・江蘇省揚州市広陵区）に出でしめ，高涼王の**那**は山陽（江蘇省淮揚道淮安県、現・淮安市淮安区）に出でしめ，永昌王の**仁**をして横江（安徽省南部の河、新安江支流、黄山南麓より発す）に出でしめ，過ぐる所殘滅せざるは無く，城邑は皆な風を望んで奔潰す。

■戊午（３日），建康は纂嚴（戒厳）す。

●己未（４日），魏兵は淮（河）上に至る。

■［臧質の盱眙進出］**上**は輔國將軍の**臧質**をして萬人を將いて彭城にて救わ使む。盱眙に至るも，**魏主**は已に淮を過ぎたり。**質**は冗從僕射の**胡崇之**、積弩將軍の**臧澄之**をして東山（安徽省淮泗道盱眙県）に營せしめ，建威將軍の**毛熙祚**をして前浦（安徽省淮泗道盱眙県）に據らしめ，**質**は城南に營す。

（魏軍が退却すると、臧質は汝南西境の刀壁などの少数民族を撃破。太子左衛率に任じられるも、以前の罪を問われて免官。しかし文帝が北伐の軍を起こし、臧質は無官のまま王方回らとともに許昌・洛陽方面に進出。王玄謨が滑台を攻撃して落とせず、臧質は将軍に志願、文帝許さず。 魏太武帝が数十万の兵を率いて彭城に向かうと、臧質は輔国将軍・仮節となり、1 万人を率いて徐州の救援に向かった。）

乙丑（１０日），魏の燕王の**譚**は**崇之**等の三營を攻め，皆な敗沒し，**質**は兵を案じ敢えて救わず。**澄之**は，**熹之**の孫なり。**熙祚**は，**修之**之兄子也。是の夕，**質**の軍もまた潰え，**質**は輜重器械を棄て，單り七百人を將して城に赴く。

■［盱眙太守の沈璞の死守で魏軍食糧不足］初め，盱眙太守の**沈璞**は官に到り，**王玄謨**はなお滑台に在り

て，(揚子) 江と淮 (河) には警 (戒) 無し。**璞**は郡の衝要 (衝きあたる要地) に當たるを以て，乃ち城を繕いて隍を浚え，財穀を積み，矢石を儲け，城の守備を為す。僚屬は皆な之に非ず，朝廷も亦た以て過ちと為す。魏兵の南に向かうに及び，守宰 (守備隊長) は多く城を棄てて走る。或るひとは**璞**に

「宜しく建康に還らん」

と勸め，**璞**は曰く、

「虜が若し城の小なるを以て顧みざれば，夫れ復た何んぞ懼れんや！若し肉薄して來攻すれば，此れ乃ち吾が報國之秋，諸君は封侯之日也，奈何して之を去らんや！諸君は嘗て數十萬人を小城之下に聚まりて而も敗れざる者を見る乎？昆陽 (河南省汝陽道葉県、現・平頂山市葉県、王導・王邑は百万を持って敗れる)、合肥 (諸葛恪は二十万を持って敗れる) は，前事之明驗也。」

衆の心は稍々定まる。**璞**は收集して二千の精兵を得て，曰く、

「足る矣！」

臧質が城に向かうに及び，衆は**璞**に謂いて曰く、**(7-306p)**

「虜が若し城を攻めざれば，則ち衆を事とする所無し。若し其れ (虜) が城を攻めれば，則ち城中は止だ見力 (現有兵力) を容れる可きのみ。地は狹く人多きは，患いを為さざること鮮し。且つ敵は衆く我は寡なきは，人は共に知る所，若し**質**の衆を以て能く敵を退け城を完くする者ならば，則ち全功は我に在らず。若し罪を避けて都に歸れば，舟楫に資るに會えば，必ず更に相い蹂踐 (ふみにじる) す。正に患いと為すに足り，門を閉じて受くる勿きに若かず。」

璞は歎じて曰く、

「虜は必ず城に登る能わず，敢えて諸君の為に之を保つと為さん。舟楫之計は，固より已に久しく息み，虜之殘害は，古今未だ有らず，屠剝の苦しみは，衆の共に見る所，其の中の幸いなる者は，北國に驅して還り奴婢と作らるるを得るに過ぎざるのみ。彼は烏合と雖も，寧ぞ此を憚らざらん邪！所謂『舟を同じくして濟れば，胡、越は一心』の者也。今兵多ければ則ち虜は速く退き，少ければ則ち緩かに退く。吾は寧ぞ功を專らにせんを欲して虜を留む可からん乎！」

乃ち開門して**質**を納める。**質**は城中を見るに豐實，大いに喜び，衆は皆な萬歲を稱し，因って**璞**と共に守る。魏人の南寇する也，糧用は繼がず，唯だ抄 (そのもの) 掠を以て資 (本) と為す。淮 (河) を過ぎるに及び，民多く竄 (のように) 匿し，抄掠して得る所無く，人馬は饑えて乏し。盱眙に積粟が有りと聞き，以て北に歸るの資 (本) と為さんと欲す。既に**崇之**等を破り，一攻して城拔かず，即ち其の將の**韓元興**を留め數千人を以て盱眙を守らしめ，自ら大衆を帥いて南に向う。是に由りて盱眙は益々守備を完くすを得る。

●［魏主瓜步に至る］庚午（１５日），**魏主**は瓜步に至り，民の廬舍を壞し，及び葦を伐りて筏と為し，

「江を渡らんと欲す」

と聲言す。建康は震え懼れ，民は皆な荷を擔いで立つ。

■壬午（２７日），內外戒嚴し，丹陽の統內は戶を盡くして丁を發し，王公以下子弟は皆な役に從う。領軍將軍の**劉遵考**等に命じて兵を將いて分けて津要を守らしめ，游邏は上は湖に接し，下は蔡洲に至り，艦を陳し營を列にし，(揚子) 江の濱を周亙す。採石 (采石磯、安徽省蕪湖道當塗県、現・馬鞍山市当塗県) より暨陽 (江蘇省蘇常道江陰県、現・無錫市江陰市) に至る，六七百里。太子の**劭**は石頭に出でて鎭し，水軍を總統し，丹楊尹の**徐湛之**は石頭の倉城を守り，吏部尚書の**江湛**は領軍，軍事を兼ね處置は悉く以て焉に委ねる。

■［檀道濟若し在ればと上嘆く］**上**は石頭城に登り，憂色有り，**江湛**に謂って曰く、

「北伐之計は，同議する者少し。今日士民は勞れ怒 (続は怨) り，慚じる無きを得ず。大夫の憂い貽すは，

予の過ち也。」
又た曰く、
「**檀道濟**が若し在れば，豈に胡馬をして此に至ら使めんや？」
上は又た莫府山（江蘇省金陵道江寧県の江口、現・南京市江寧区）に上り，形勢を觀望し，**魏主**及び王公の首を購うに，封爵、金帛を許す（懸賞金をつける）。又た人を募って野葛酒を繼ぎて空村の中に置かしめ，以て魏人を毒さんと欲するが，竟に傷つく能わず。
●**魏主**は瓜步山を鑿ちて蟠道を為り，其の上に氈屋を設ける。**魏主**は河南の水を飲まず，橐駝を以て河北の水を負わしめて自ら隨う。(7-307p)**上**に橐駝、名馬を餉り，幷せて和を求め，婚を請う。**上**は奉朝請（朝会の請召を奉ずる官）の**田奇**を遣わして珍羞の異味を以て餉る。**魏主**は黃甘（柑橘類）を得て，即ち之を啖らい，並びに大いに酃酒（三国時代の名酒・長沙の酃湖の水で作った酒）を進む。左右に耳を附けて語る者有り，
「食中に毒有らん」
を疑う。**魏主**は應じず，手を擧げて天を指し，其の孫を以て**奇**に示して曰く、
「吾は遠く來たりて此に至るは，功名を為さんと欲すに非ず，實に好みを繼ぎ民を息め，永く姻援を結ばんと欲す。宋が若し能く此の孫に女を以て妻せば，我は女を以て**武陵王**に妻せん，今より匹馬復た南を顧みず。」
■<u>［江湛殺害］</u>**奇**は還り，**上**は太子の**劭**及び群臣を召して之を議す。衆は並びて
「宜しく許さん」
と謂い，**江湛**は曰く、
「戎狄に親無く，之を許すは無益なり。」
劭は怒り，**湛**に謂って曰く、
「今三王に厄在り（江夏王義恭・武陵王駿は澎城、南平王は壽陽にあり），詎んぞ宜しく苟しくも異議を執らん！」
聲色は甚だ厲（厳しい）。坐は散じ，俱に出で，**劭**は班劍及び左右をして**湛**を排せ使め，**湛**は幾僵仆（倒れる・死ぬ）に至らんとす。
■**劭**は又た**上**に言って曰く、
「北伐は敗辱し，數州は淪び破れ，獨り**江湛**、**徐湛之**を斬る有り、以て天下に謝す可し。」
上は曰く、
「北伐は自ら是れ我が意なり，**江**、**徐**は但だ異ならずのみ（異議を持せざる）。」
是に由りて**太子**は**江**、**徐**とは平らかならず，魏もまた竟に婚を成さず。

平成 30 年 8 月 26 日　　本格翻訳開始　11527 文字
平成 30 年 12 月 15 日　　「日本書紀暦日原典」にて暦日調査、同日再々読終了　19931 文字
令和 2 年 12 月 14 日　　23620 文字、現代地名・年表対応
令和 3 年 8 月 21 日　　書下し終了　24129 文字